

私の文学世界は大きく分けて二つあります。一つは恋愛や親子関係を繋ぐ感情の劇――愛情と憎悪が紡ぎ出す人生の苛酷な流れをテーマにしたものです。もう一つは、アジアの世界――戦争や政治を軸に、歴史のなかで生きる人間の主体性をテーマにしたものです。

十代で母親が山梨から東京へ出奔し、親子で裂かれて暮らさなければならなかった経験は、父母を動かす男女の関係と愛情の本質に眼を向けずにはいられませんでした。また自身の恋愛や結婚によってその深い構造をあらためて知らされ、考えさせられることにもなりました。愛情はすべてを生み出すエネルギーであり、困難を乗り越えていく大きな力になります。また同時に醜い、凶暴な力にもなり、様々な悲劇をも生んでいきます。その大きな渦を覗き、生命の大河の流れを探りたいのが一つの方向です。

人生の苛酷な時の流れや、社会の容赦ない圧力に晒され、それでも愛憎を軸にひたすら生きようとする人間の姿に、私は愛着を覚えます。理不尽なものに翻弄され、業のような宿命を負いながら、なお前へ進もうとする人間の生きる姿は、人生の深い模様として限りなく私の胸をとらえるものです。

またアジアはもう一つの私の大きなテーマです。一九八二年に訪れたタイ・カンボジア国境で、難民一七人がベトナム軍の砲弾一発で爆死した事件を目の前にして以来、戦争と歴史の問題をあらためて考えるようになりました。八四年から九〇年まで、タイに滞在し、カンボジア問題を中心に現地での生活を経験してきました。

二〇〇万人とも言われるボル・ポト政権下の虐殺は、太平洋戦争につながる現代の相貌として、残酷な歴史の跡を残しています。歴史に蹂躪される人間の姿をアジアの風土のなかに見ながら、日本の戦争を振り返り、現代が直面している危険な状況を認識し、それを乗り越えようとする人間の営為を文学として探っていきたいと思っています。

アジアと日本を過去と現在から繋ぎながら、歴史の下でうごめき足掻く人間の行為を追究していきたい希望です。

文学は、私にとって、苛酷な生の流れを見つめ、個々の苦闘と絶望、歓喜や希求を、表現を通しての共有のうちに、心の力を得ようとする営為です。生きる証が、さらにだれかの心の中でも生き続けることができれば幸いです。

インターネットで、文学のどんな可能性が広がるか、新たな展開を求めて、挑戦してみました。